

「多武峯少将物語」成立試論

和田員代

はしがき

酒井家旧蔵本「たむの峯の少将」は、錯簡を復旧し一部脱落を補って、現在、最も信頼すべき「多武峯少将物語」の写本とされているが、この酒井家旧蔵本の第二のくくりの中央の一紙（物語十四段後半～十六段前半）の脱落を、前田綱紀手沢本等によって補うにあたり、玉井幸助博士は、その中間にある「物思ひのやむよもなくてほとふれは、忘るることもしゐのわかきか」の歌を取り上げ、この歌の上句と下句の中間になお一枚或いは二枚の脱落があったのではないかとの説をたてられた。（註1）別に山口博氏の発見された伊勢集押紙は、「多武峯少将物語」との共通歌七首及び他に二首の歌を含む一葉であるが、この伊勢集押紙九首のうち「多武峯少将物語」にみえない二首について、玉井博士は右推定脱落部分にあったのではないかと言われている。（註2）

今、私は、諸賢の批判を乞うべく、この御意見に対し、この伊勢集押紙と「多武峯少将物語」との関係についての小論を試み、合わせて、酒井家旧蔵本による「多武峯少将物語」の構成と成立について論を重ねてみた。この二小論は昭和三十六年度に岡一男

先生の御指導のもとに作成した私の卒業論文からの抜粋である。

註1・2 塙書房刊「多武峯少将物語」

一、伊勢集押紙と「多武峯少将物語」

伊勢集押紙とは次の如き一葉である。

オムキミノ御モトヨリ御サウスクタテマツリタマヘルミナ
カヘシタヘトタマウケルハ御サウスクタテマツリタマ
ウトテ

(1) オクヤマノコケノコロモノクラヘミヨイツレカツユハカ、
リマサルト

御カヘシ

(2) ツユシモアシタユフヘシオクヤマコケノコロモカセハサハ
ラシ

シウトメノ北ノ方

(3) キミカ、ケミエモヤスルトコロモカハナミタテヌヒソテノ
ヌルカナ

カヘシ

(4) ワカタメニナミノタツナルコロモカハキテタニミエムトシ
ヲワタリテ

マタキサイノミヤヨリ

(5) ツユシモノオクアカツキニラクトイヘルヨノトコニハフス
マナカラム

御カヘシ

(6) ヨルトマモオキフスマナキヤマフシノトコロサタメヌニハ
ヨリソスル

御ハラカラトチノオノノオムサウスクシテタテマツリタ
マヒケルヲミカトキコシメシテイミシウアハレカラセタマ
テ

(7) ミヤコヨリクモノウヘマテマノキノマカハノミツヤスミヨ
カルカラム

トキコエタマウケルハカヘシ

(8) コノヘノウヘノミツネニコヒシクテクモノウヘタスミヨ
シ

ヨカハニスミタマウケルコロチ、ヲト、ユメニミエタマフ
テカクタクトウオハスルトナトカタラヒテユメノウチニキ
コエタマフ

(9) キミカスムヨカハノミツシキヨケレハチキカケハツネニミ
エナム

山口氏の言われるように、(註1)この押紙の(1)~(8)は、高光へ
御衣贈呈を中心として同時期に詠まれた、高光に関する歌の群で

あると考えられる。氏の言われるように、この押紙はこれらの前
に来るべき部分と後に続くべき部分を持った何かから書写された
ものである。押紙が贈歌とそれに対する高光の返歌から成り立
っており、一首づつの独立性が強いことを見れば、その何かが高
光の詠草集であったであろうとする氏の説にうなづくことが出来
る。押紙は「多武峯少将物語」から抜き出されたものではないで
あろう。その理由を次に簡条書で述べよう。

(i) (8)及び(9)の歌の作者が物語と異っている。すなわち、(8)の
作者は押紙では「シウトメ北ノ方」(師氏北の方)、物語では高光
の北の方となっている。また(9)の作者は押紙では「キサイノミヤ」
(中宮安子)、物語では式部卿の北の方となっている。押紙が物語
からとられたとすると、歌の作者が異なるということはないのでは
なからうか。書写の際の誤りとしては二箇所は多すぎるように思
える。(6)は新勅撰集雑歌三に、「少将高光横川にのぼりて出家し
はべりける時ふすまてうじて給はせける御歌 天曆中宮」として
載せられており、勅撰集がこの歌を天曆中宮とするには何らかの
根拠があったと思われるから、これはおそらく押紙の方が正しい
のであろう。そうすると書写の際に意識的に誤りを正したとも考
えられるが、それよりも作者を中宮安子とした集が別にある、
それから書写したと考える方が自然である。

(1)の作者も押紙と物語で異っていると言われているが、この
歌の物語当該部分を次のように読めば問題はないと思う。

さて中納言殿の、北の方この君の御装束、袷装よりはじめて
一くだりせさせ給ひて、これ山へたてまつりければ、山へた

てまつり給ふ。「さて中納言殿は、北の方がこの君の御装束を、袈裟を始め一領仕立てなさって、これを山へさしあげるとのことであつたので、(その御装束を)山へさし上げなされた。(そえられた歌、君が着しきぬにしあらねば墨染のおぼつかなきに泣きてたちつる は北の方の作、奥山の昔の衣にくらべ見よいずれか扉のおきはまさると は師氏の作。)」

(ii) 押紙では(1)~(8)は同時期に詠まれた一つづきのものとして扱われているが、物語では該当する所が前後二箇所に分離している。しかも前の部分と後の部分では時が違っている。すなわち押紙(1)(2)に該当する物語十四段は四月のことと推測されるのに、(8)に該当する三十一段以降は夏のこととなっている。説話が二箇所に分離しているのは、錯簡によるとも考えられるが、物語十四段の次の脱落部分に三十一段以降をあてはめるのは不可能である。何故なら十四段と三十一段以降では時期が異っており、又三十四段は物語が完結したことを示す語句を持っている段で、途中には入れられないからである。だからと言って十四段を三十一段の前に持って来るのも不自然である。故にこの説話の分離は錯簡によるものではなく、別に述べるように成立の事情によるものである。従って、この押紙と物語の相違は、押紙が物語から抜き出したものでないことを示している。

(iii) 押紙には物語にない歌がある。すなわち押紙の(7)(8)は物語にない。この二首は押紙の詞書から判断すると三十四段のあとに来るべきもので、三十四段が現在の位置に必然性を持っている以上、物語は三十四段の後に説話を持っていかなかった、すなわち(7)

(8)は物語になかったと考えられる。押紙の記事の方に信頼を置く、山口氏の言われるように物語は構想上事実を変えていると言える。故に時期の内容の少し違うこの二首が一四段の次の脱落部分にあつたかも知れない。そういう仮説は立て得るが、もしそうだとすると、当然押紙の詞書と物語の内容がくい違って来るので、この場合も、押紙が物語から写されたものだとは言えなくなる。

押紙と「多武峯少将物語」は多くの共通歌を持ち密接不離の關係にある。しかし押紙の歌は「多武峯少将物語」から抜き出されたものではなく、これとは別の高光の詠草集があつて、そこから抜き出したものではないかと思う。それは或は玉井博士の言われるように、勅撰集の撰歌の資料としてであつたかも知れない。

注 1 国語国文昭和三十五年二月「異本高光集考」

なお段の句切り方は、後の表にもその大体を示すが、ほど玉井幸助博士の「多武峯少将物語」によつた。

二、「多武峯少将物語」の構成と成立

「多武峯少将物語」の各説話を検討して、次頁以下のような表を作成した。

「多武峯少将物語」は、表にも示したように、一~五段、六~九段、十~二十六段、二十七段以下の四グループに区分することが出来る。それは六~九段と二十七段以下が、各々物語全体と違つた性格を持っているからである。

先ず表の時期の欄をみると、この物語は応和二年に始つてほぼ時

段	時期	書	主	題	主人公	返歌詞書
(1)	応和元年 十二月	もとよりかかる御心ありけれど……、……御 乳母と愛宮となむものもきこしめさず泣き給 ひける。	少将出家	高光	歌は文章に融合している。	
(2)	応和二年 初春	かくいひて、いふかひなくて月ごろになりぬ …… ……つねにこの二所かなしうあはれなること をなむ聞えかはし給ひける	愛宮より女君へ (尼にならんとするこ と)	北の方	贈答は物語につくりかえ られて原形をくずしてい る。	
(3)	三月	かくてかの桃園の中納言殿の中將の君まいり 給ひたりけりと聞ゆる人ありければ……	北の方の兄の来訪(か たかはれること)	北の方	贈答は物語につくりかえ られて原形をくずしてい る。 御返(兄中將↓北)	
(4)	三月ばかり	北の方から高光の姉へ (うぐひす)	北の方	贈答のみ、原形のままで。 御返(姉↓北)		
(5)	かくて愛宮の御許よりきこえ給ひける。	愛宮より北の方へ (物思ひ)	愛宮	贈答のみ、原形のまゝ		
(6)	応和二年 四月	だれもだれも御はらからの君たちこの愛宮の 泣き悲しみ給ふをあはれがり聞えたまふも、 ものもきこえておはしふる。時々故式部卿の 北の方は…… また式部卿の北の方もそのとのに……	故式部卿の北の方より 愛宮と北の方へ (ほととぎす)	かへし (愛↓式北) 御かへり (北↓式北)		

(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)
	四月 応和二年	四月 応和二年						
さらに京に出てじとぞのたまひける	さて中納言殿の、北の方この君の御装束……	さてこの姫君……又四月のつごもりばかりに	だれもだれもかの姫君の御なげきをあはれがり給ひけり。ももぞのことにきこゆるに男君つねにおはして……	また少将のつねに見たまひし御鏡を姫君みたまひて	さてかの桃園の姫君	かくて愛宮の御許に右衛門佐おはして、少将の君おはしつるやう……		かくて按察大納言の北の方……
断章 (五六百字或は千二百三 百字欠か)	贈る 母北の方高光へ御衣を	高光より北の方へ (御精進)	北の方の兄の来訪	北の方から高光へ (鐘の影)	北の方の御なげき (あけの衣)	右衛門佐愛宮を訪う	断章	三宮より愛宮へ (十四丁オ一面白紙)
北の方	母北の方	北の方	北の方	北の方	北の方	愛宮		愛宮
	御返り (高↓師氏妻)	かへし (北↓高光)	かへし (北↓兄)	御かへり (高↓北)		御返 (右衛門佐↓愛)		贈答のみ 御かへし (愛↓三宮)

(25)	(24)	(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)
			応和二年 五月						
さてかの入道の君の御子は……	かくてこの入道の君の御夢に……	とみのこうじのきむたち……	五月ついたちに御はらからの君たち……	さてこの姫君	宮のこのかみの…… ことこのきむだちはしはしこそあはれがり給ひしか、あい宮ぞおぼしやむことなかりける。	ひに大ひめきみの御方へつたへ給ひけり	また右衛門佐中納言どにつたへ給ひけりつひに大ひめきみの御方へつたへ給ひけり	京の殿より御文に……	書き出しの部分欠 さてこの姫君に早うより心かけきこえたりし人もとぶらひけり
御子が父を慕うこと (小繪)	父おとの夢	高光の兄弟山を訪訪	高光の兄弟山を訪問	北の方より高光へ	兼通の訪問 (山彦)	問(えりくぐつ)	右衛門佐が北の方を訪	師氏より北の方へ	北の方から愛宮へ (しのぶの草)
北の方	高光	高光	高光	北の方	北の方	北の方	北の方	北の方	北の方
				御返し (高↓北)		御返 (北↓右衛門佐)	贈答のみ 御かへし (北↓師氏)		贈答のみ

26	27	28	29	30	31	32	33	34
夏	正月	正月	春		夏	夏	夏	夏
	兵衛佐の君入道の君の御かはりに……	かくて近衛つかさの人きて歌ひののれど……	桃園の中納言の君……	また按察殿より桃園北の方の御許に、近江の北の方の御文……	この禪師の君の御はらからの君たち……	かくてこの中宮におはしますをみな人おんぞたてまつれ給ふが……	愛宮われなにわさをせんとて……	わが北の方には…… すべて言ひつくすべくもなくいみじく あはれになむ
(あふことのかたみ)	新少将	祝い	師氏が山へ花瓶を贈る	近江の北の方より高光北の方へ	高光の姉妹たちが山へ綿物を奉入	北の方も御衣を奉入	愛宮ゆかたびらを贈る	終章
北の方	北の方			北の方				
			御かへり (高↓師) かへし (高↓殿上人)	御かへり (北↓近)			御返 (高↓愛)	

＊ウラケイでかこんだ部分は愛宮がわから描写されている。

を追って配列されているのであるが、二十七段に至ってそれが突然応和二年の正月にもどり、再びここから応和二年春、夏と続けられている。換言すると、二十七段以下は、独自に高光の出家当初から多武峯時代直前までの説話を、順序正しく持っているといふことになる。ただし三十段は時期が分らないので一時のけておこう。つけ加えておくことは、表でもわかるように、「多武峯少将物語」は一貫して高光の北の方を主人公として書かれているのに対して、二十七段以下では誰が主人公かわからなくなっていることである。次に主人公の欄をみると、七段から九段までの間だがまとまって愛宮を主人公にしている。返歌詞書の欄をみると、この間の描写はすべて愛宮の側に立ってなされている。この場合、八段は、酒井本によるとその前に白紙脱落部分を持っていて、断章となっているので一時のけておこう。

さて、「多武峯少将物語」の説話の配列は、個々の部分では作者の連想によって主題の似たものがまとめて配列されているのだが、このことを頭に置いて、改めて八段と三十段を考えてみると、この二段の現在の位置が極めて不自然であることがわかる。三十段についてみると、二十九段の内容が師氏が銀の花瓶を山へ贈ることであるのに対して、三十段の内容は近江の北の方が高光の北の方へ慰めの便りをするので、この二説話を三十段の書き出しである「また」でつなぐことは何としても不自然である。一方、六・七・九段の内容を考えてみると、六段は、故式部卿の北の方が愛宮へ慰めの便りをするのと、同じく式部卿の北の方が高光の北の方へ慰めの便りをするのが「また」でつながれてい

る。七段は按察大納言の北の方が愛宮へ慰めの便りをするのである。九段は愛宮の所に右衛門佐が訪れて山の君の様子を語ることである。三段とも、愛宮の兄弟達が愛宮や高光の北の方を慰めることである。そこで、かりに三十段を七段の後に持って来ると、両者の内容上の続き具合は極めて自然であり、三十段の書き出しの「また」も生きて来るのではなからうか。そして三十段が抜けたあとへ八段を当てはめてみると、こちらも極めて自然につながるのである。すなわち、八段はその断片からうかがうと、都人の誰かが山へ高光を訪問した記事の後半であろうと思われるから、花瓶贈呈記事の後に持って来るのは適當である。

この、八段と三十段の入れ替え作業は、三十段の分量が、八段とその前の脱落部分の分量を合せた分量とほぼ等しいことによつてより確実に証明される。そこで私はこの八段と三十段の入れ替え作業は正當であると結論したいと思う。

返歌詞書の欄をみると、三十段は愛宮の側から描写されていることがわかるから、この新しい配列によると、六・九段のグループはすべて愛宮の側から描写されたものということになるし、主人公についても、愛宮が主人公である区間に北の方が主人公の説話が挿入されるとは考えないで、六段において故式部卿の北の方が、愛宮と高光の北の方の両方に便りをしたように、按察大納言の邸からも、愛宮には按察大納言の北の方が、高光の北の方には近江の北の方が、それぞれ便りをしたという意味にとれば、同じ形式の配列がなされたと考えることが出来るから、ますます自然であり、三十段と八段が現在の位置にあるのは、「多武峯少将物

語」における錯簡であると言うことが出来ると思う。(おそらく
蔵本が書写される前にすで
に起つていた錯簡であろう)

ここで説明をもとに戻すと、先に分けた「多武峯少将物語」の
四区分は、この錯簡を復旧することによって、矛盾なく証明出来
るようになった。「多武峯少将物語」は、その途中と最後にそれ
ぞれ全体とは性格の異なる説話群を持つていることが明らかにな
った。

それではこの二説話群はどういう事情からそれぞれの位置に置
かれることになったのだろうか。おそらく両者共に、成立当初の
「多武峯少将物語」には無かつたもので、後に、何らかの機会に
附加されたものであらう。

前者、六―九段の説話群は、愛宮を主人公にして、愛宮の側か
ら書かれたものであつた。六段の後半の贈答に、四月つごもりは
かりと時が示されてはいるが、この部分の説話がすべて四月つご
もり前後であつたとは限るまい。おそらく、愛宮に対する兄弟の
哀れみを主題に集められた説話群であらう。このグループに関し
ては、作者は愛宮側の人だつたと思う。作者は、「多武峯少将物
語」(この部分がまだなかつた頃の)を見ているうちに、我が方
の愛宮の説話を入れたいと思つた。そこで丁度五段で愛宮が北の
方に便りをした説話に誘われるように、その次に愛宮に関するこ
の説話群を挿入したのであらう。(時期も、三月つごもりのあと
で丁度よい所から)六段が、「だれもだれも御はらからの君た
ち、この愛宮の泣き悲しび給ふを聞き給ひて、あはれがり聞え給
ふも、ものもきこえておはしふる。時々故式部卿の北の方……」

の書き出しを、ことさらのように持つているのも、これをよく裏
付けている。

後者、二十七段以下の説話群は、前者とは又別の性格をもつて
いる。それぞれの説話の内容を見ればわかるように、このグルー
プの各説話は、すべて世間的に相当有名であつたろうと想像され
るものばかりである。二十七段中の高光北の方の歌は「同じ時恒
徳公兵衛佐に侍りけるかわりの少将になり侍りて、喜びに大納言
のもとにまうできて侍りけるを見てよみはべりける 大納言師氏
女 それとみる同じ三笠の山の井の影にも袖のぬれまさるかな」
として新勅撰集にとられてゐるし、三十一段の式部卿の北の方の
歌も「少将高光横川にのぼりて出家し侍りける時ふすまてうじて
給はせける御歌 天曆中宮 つゆ霜のよひ曉に置くなれば床にや
君がふすまなるらむ」として同じく新勅撰集にとられてゐる。お
そらくこのグループも、後人が社会的にも有名で是非書き加えて
おきたい思つて、筆をとつたのであらう。ここでは、各説話とも
主人公は定かでない。二十七段―二十八段に北の方を主人公に書
いているのは、筆者が前の説話に続けようとした意図の表れであ
らう。又順を追つて書かれてゐるにもかかわらず、文頭に時の転
換を示す言葉が置かれてゐない。これらの事は、この説話群が、
物語が完結した後に、始めの作者の構想とは関係なく附加された
ものであることの証左であらう。